

『パイドン』における魂不死の証明の構想（二） —— “想起説” による証明（72e-77d）

小 野 木 芳 伸*

The Unity of the Arguments for the Immortality of the Soul
in Plato's *Phaedo* (2): the “Recollection” Argument (72e-77d)

Yoshinobu ONOGI *

前稿¹⁾の冒頭でも述べたように、われわれの『パイドン』解釈の方針は、『パイドン』において試みられている幾つかの魂不死の証明が通常別々に扱われる現今の傾向に反し、それら魂不死の証明が密接不可分の総体を成しているということを示すというものである。以下の小論におけるわれわれの目的は、この方針に沿って、『パイドン』において魂不死の第二の証明である想起説のテキスト（72e-77d）を検討し、想起説の十全な理解のためには前後の議論、とりわけ後のイデア原因論の理解が不可欠であるということを示す点に存する。

一 想起説に至るまでの文脈

『パイドン』という対話篇においては、牢獄の中で刑死を待つソクラテスと、それに立ち会ったソクラテスの弟子というべき人々のうちとりわけケベスおよびシミアスという二人の人物との間で哲学的議論が進められていくのであるが、まずはいわゆる魂不死の“円環的”証明が行なわれる。その結論部は次のようになっている。「生きるということに分取している物すべては死ぬるのであるとすれば、そしてそれらの物が死ぬときには死んでしまった物はこの形〔＝死〕のうちに留まって再生することがないとすれば、最後にはすべての物が死んでしまい何物も生きてはいないということになるのが必然であろう。なぜなら、仮に生きている物というのは〔死んでしま

*国際関係学部・非常勤講師（Part-time Lecturer）

っている物からではなく] 他の物から生じるのであるとすれば、そして生きている物は死ぬのだとすれば、生きている物すべてが死へと消尽されぬような、どんな手立てがあるというのか。」(72c5-d3)²⁾ このようにして、死にゆくことという生成に対して再生することという生成があることから、死んでしまった者の魂の存在が導かれるのである (72d8-e1)。

話がここまで進んだところで、対話者の一人ケベスが、別の議論によっても我々の魂の不死が示されると言う。すなわち、「学ぶ」ということは「想起する」ということであり、この考え方によれば、我々が今想起している物事を我々は以前の時において学んでしまっていることが必然であり、さらに、このことは、我々の魂がこの人間の形を取って生じる以前に存在していたのでなければ不可能である、したがってこの議論に拠っても魂は何か不死の物であるということになる (72e-73a)。

二 想起の実例とその問題点

以下、われわれは『パイドン』における想起説を概観するとともに、そこに含まれる問題点、またその問題点が指し示す解釈の方向を示したい。³⁾

まず、想起説が語られる運びになった最大の動機である魂の不死という観点に沿って、次の論点が確定される。「もし誰かが何かを想起するのであれば、その人はそれをかつていつかの時において知っていたのでなければならない。」(73c1-2) そして、これに続いて、プラトンがここで言う想起とはいかなるものであるかが、一般的に規定される。「人が何かを見るなり聞くなり他の感覚で捉えるなりした上で、その物を知るだけではなく、それについて同じ知識ではなく別の知識が存するところの別の或る物をも思惟するとき、その人は、それについて自分が思惟を捉えたところの物を想起したことになるのだ。」(73c4-d1)

以上の想起の一般的規定に次いで、想起の実例として次のような例が挙げられている。

- (a)人間についての知識と豎琴についての知識とは別であり (73d3)、恋人たちというのは自分の愛する少年が使う習わしになっている豎琴だとか衣服だとかを見るときには、その豎琴を知るとともに思惟の内でのその豎琴の持ち主である愛する少年の姿形を捉えるのであり、これは想起である (73d5-8)。それは、人がシミアスを見てケベスのことを想起するということがしばしば起こる (73d9) のと同様である。
- (b)馬の絵や豎琴の絵を見て人間を想起するとか、シミアスの絵を見てケベスを想起するということもある (73e5-7)。
- (c)シミアスの絵を見てシミアス本人を想起することもある (73e9-10)。

以上の想起の実例のうち、次に述べられる〈アイデアの想起〉を例示するものとしてもっともふ

さわしいのは、事例(c)の、シミアスの絵を見てシミアス本人を想起する、というものであることに異論を唱える解釈者はいないであろう。しかし、われわれとしては、この問題に足を踏み入れる前に、上の想起の叙述について次の問題点を指摘しておきたい。その問題とは、〈想起させる物についての知識と想起される物についての知識とは別々でなければならない〉という想起の条件(73c8)がいったい何を意味しているのか、ということである。或る解釈者の言葉を借りれば、事例(a)や事例(b)で挙げられているシミアスとケベスを取ってみると、シミアスについての知識とケベスについての知識とが単に対象が数的に異なるがゆえに異なるというのであれば、想起させる物と想起される物とが数的には異なるかぎり、いかなる想起の場面にあってもこの〈想起させる物についての知識と想起される物についての知識とは別々でなければならない〉という条件は必ず満たされることになり、この条件を挙げることは無用になるであろう。⁴⁾ 他方で、もし〈知識が別〉という条件の意味するところが、想起させる物の認知の中に想起される物の知識がすでに入っているとはいけない、ということであるとすれば、(b)の、シミアスの絵を見てケベスを想起するという事例はこの条件を満たすものとして解釈しうが(ケベスのことを考えずにシミアスの絵をシミアスを描いたものと認知することは可能である)、続くアイデアの想起の議論との関連ではもっとも重要な役割を果たすはずの事例(c)、すなわち、シミアスの絵を見てシミアス本人を想起する、という例はこの〈知識が別〉という想起の条件を満たさぬことになる。⁵⁾ これは『パイドン』における想起説全体を解釈するにあたってきわめて不都合な事態である。

われわれは今ここでこの問題について最終的な答を出すことはできないが、さしあたっては次の点に読者の注意を喚起しておきたい。それは、上述の想起の事例(a)において、「人間についての知識と堅琴についての知識とは別である」(73d3)と言われていること、それから、そこで語られる人間というのがけっして人間一般を指しているのではなく、「恋人たちの愛する少年」という特殊な人間を指しているということである。⁶⁾ われわれの見るところでは、この点についての従来の解釈の欠陥は、「知識」をもっぱら知覚の場面のみに限定しているという点に存する。「人間についての知識と堅琴についての知識とは別である」という言葉は、知覚対象としての人間についての知識と、やはり知覚対象としての堅琴についての知識とに関わるものとして理解すべきではない。堅琴についての知識は知覚対象である堅琴を認知するものと解してさしつかえはないが、人間についての知識というのはけっして単なる知覚対象としての人間を認知するといったものではなく、恋人が自分の愛する少年を知るときの知を典型として理解すべきであろう。そして、恋人が自分の愛する少年を知るときの知というのがいかなる知であるかを一言で規定するのは困難であるが、それは少なくとも相手を物的対象として知覚するだけのものではなく、通俗的な言い方をすれば、相手の人格に関わるような知り方でなければならないと予想される。

この点を念頭に置くならば、想起の事例(b)において、馬の絵や堅琴の絵を見て人間を想起するという例を挙げ、さらにまたシミアスの絵を見てケベスを想起するという例を挙げた上で、事例(c)で、アイデアの想起との連関では一番の眼目である、シミアスの絵を見てシミアス本人を想起するという例に辿り着くといった、かなりまわりくどい議論の仕方をプラトンがしている事情

も次のように理解できる。これらの例において想起させる物の内容はさまざまであるが、それらはすべて「絵」であるという点では共通している。他方で、想起される物の方はすべて人間であるという点で共通している。すなわち、これらの例で意図されているのは、想起させる物は（「絵」として）知覚される一方、想起される物は（「絵」の）知覚とは異なった知られ方をするのだ、という点を理解させようとするものだとわれわれは考える。

三 等しさのアイデアの想起

上述のように、アイデアの想起の議論に入る直前の想起の事例 (a) (b) (c) を見るかぎり、想起に際しては、想起させる物についての知識と想起される物についての知識とが異なるものでなければならぬという条件はけっして突飛なものではないのであるが、この点が従来の解釈で見落とされてきたのにも理由がないわけではない。それは、なんといっても『パイドン』の想起説の眼目は〈アイデアの想起〉であり、そのアイデアの想起を説明するにあたっていちばん重要な例は(c)の〈シミアスの絵を見てシミアス本人を想起する〉というものであり、この事例は〈像から本物を想起する〉ものと解された上で以降の議論にあってはこの例にだけ注意が向けられ、〈恋人を想起する〉という事例 (a) などは等閑視されてきたからである。さらに、なぜ〈恋人を想起する〉という事例 (a) が無視されるのかといえ、アイデアの想起にあっては、想起される物の代表が〈等しさのアイデア〉という、自分の愛する人間や人格といった事例とは一見かけはなれたものであるがためである。この点を念頭において、アイデアの想起が『パイドン』ではじっさいのところどのように導入されているのかを確認しておきたい。

まず、前節で述べた想起の事例 (a) (b) (c) が挙げられた直後、想起一般について次のようなことが言われる。すなわち、想起には似た物からのものと似ていない物からのものとがある (74a2-3)。そして、人が似た物から何かを想起する場合には、想起させる物は想起される物よりもどこか劣っているのではないかどうか思惟するという経験をするのが必然である (74a5-7)。

テキストでは以下、知覚世界における等しい諸事物、たとえば相互に等しい木材や石材が等しさのアイデアを想起させるという事例が次のような手順で語られている。

- (1) 我々は等しい物そのもの ($\alpha\upsilon\tau\omicron\ \tau\omicron\ \acute{\iota}\sigma\omicron\nu$ = the equal itself⁷¹⁾) [=等しさのアイデア] が在ると言う。これは、木材が木材に等しいとか石材が石材に等しいとか言う場合の等しさとは異なる物である。(74a9-12)
- (2) 我々は在る物そのもの [=アイデア] を知っている。(74b2)
- (3) 我々は木材や石材などが等しいのを見て、これらから、これらとは異なるかのもの [=等しさのアイデア] を思惟したのだ。(74b4-6)

次いで、知覚世界の等しい諸事物と等しさのアイデアとの相違が次のように示される。

- (4) 石材や木材が同じものでありながら、或る人には等しいものとして現われ、或る人には等しくないものとして現われる⁸⁾ ということがある。(74b7-9)
- (5) 等しい物どもそのもの ($\alpha\upsilon\tau\acute{\alpha}\ \tau\acute{\alpha}\ \acute{\iota}\sigma\alpha$ = the equals themselves) が君に等しくないと現われたり、あるいは等しさ ($\acute{\eta}\ \acute{\iota}\sigma\acute{o}\tau\eta\varsigma$ = the equality) が不等性として現われたりはしなかった。(74c1-2)
- (6) したがって、等しい物ども [= 知覚世界の等しい諸事物] と等しい物そのもの [= 等しさのアイデア] とは同じではないのだ。(74c4-5)

以下、ふたたび話は本筋であるアイデアの想起に戻る。

- (7) これらの等しい物ども [= 知覚世界の等しい諸事物] から——これらはかの等しい物 [= 等しさのアイデア] とは異なっているのであるがそれにもかかわらず——君はかの等しい物 [= 等しさのアイデア] の知識を思惟して捉えてしまっているのだ。(74c7-9)
- (8) では、かの等しい物 [= 等しさのアイデア] はこれらの等しい物ども [= 知覚世界の等しい諸事物] に似ているのだろうか、似ていないのだろうか？ それはどちらでもよい。(74c11-13)
- (9) 君が或る物を見て、その視覚から他の物を思惟するかぎり、それが似ていようと似ていまいと、これは想起として生じたということが必然である。(74c13-d2)

四 等しさのアイデアの想起をめぐる問題 (一) ——類似性について

前節に紹介した議論についてわれわれはまず、次の問題点を指摘しておきたい。⁹⁾ それは以上の想起の議論で取り上げられている〈等しさのアイデア〉というものについて、手順(8)において、等しさのアイデア(想起されるもの)が知覚世界の等しい諸事物(想起させるもの)に似ているか否かはいつでもよい、と言われている(74c11-13)という点である。等しさのアイデアの想起にあつて、「似ているか否か」は本当にどうでもよい問題なのであろうか。

けっしてそうではない。なぜなら、先に断つておいたとおり、等しさのアイデアの想起が語られるに当っては、その前の想起の事例のうち(c)の、シミアスの絵からシミアス本人を想起するという事例が範例となっているとみなすのが当然であり、この想起は明らかに似た物からの想起であるからである(73e-74a)。さらに直接的に、等しさのアイデアの想起の議論にあつて、想起させる物は想起される物に似ているとされている(74e3)。要約するなら、シミアスの絵からするシミアス本人の想起も、等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起も、ともに似た物からの想起なのであり、しかも、その〈似ている〉という特性は、厳密には〈似てはいるが劣っている〉

ということなのであり (74d9-e4; 74d5-7, 75a1-3, a11-b2, b7-8), これは等しさのアイデアの想起の議論にあってきわめて重要な役割を果たすことが予期されるのである。ここにおいて、『パイドン』の想起の議論では類似性の概念が重要であることは明らかである。

したがって、想起説における類似性の概念はパラドシカルな状況にある。等しさのアイデアの想起が語られる際に、その直前の、シミアスの絵からシミアス本人が想起されるという事例(c)が範例になるはずであるという点を考慮すれば、等しさのアイデアの想起にあっては想起させる物と想起される物との間の類似関係は重要なものであることが明らかである一方、等しさのアイデアの想起の議論にあっては手順(8)で「似ているかいないかはどちらでもよい」と明言されている(74c11-13)のもまがうかたない事実である。

われわれの見方では、このパラドクスを解く糸口は次のテキスト上の事実に見出される。すなわち、『パイドン』にあっては先の手順(8)とその続きの手順(9) (74c13-d2)を除くと、想起させる物(シミアスの絵、等しい諸事物)が想起される物(シミアス本人、等しさのアイデア)に似ていると言われることはあっても、逆に想起される物(シミアス本人、等しさのアイデア)が想起させる物(シミアスの絵、等しい諸事物)に似ていると言われることは一度もない、という点である。¹⁰⁾ テキスト上のこうした事態が意味するところは何であろうか？

ここでわれわれの日常的な経験の場面をふりかえてみると、たとえばリンゴは梨に形が似ているとか、ソクラテスはテアイテスに容姿が似ているとかいった場合には、類似関係を逆にし、梨はリンゴに形が似ているとか、テアイテスはソクラテスに容姿が似ていると言っても何ら問題はない。これらの例についてなぜ類似関係を逆転できるかという理由を考えると、これらの例では比較される二つの物が同じレベルにあるから、というのが妥当な答であろう。すると逆に、〈AはBに似ている〉と言うことはできるが〈BはAに似ている〉と言うことはできないようなAとBは同じレベルにはない二つの物であるとの予想を立てることができる。そして、『パイドン』において等しさのアイデアの想起の範例となるべき想起の例が(c)の〈シミアスの絵を見てシミアス本人を想起する〉というものであったことを思えば、また、シミアスの絵とシミアス本人の二者は〈像と本物〉という関係にあることを思えば、〈AはBに似ている〉と言うことはできるが〈BはAに似ている〉と言うことはできないようなAとBというのは、像と本物を指すものと理解できる。

そうすると、〈AはBに似ている〉と言うことはできるが〈BはAに似ている〉と言うことはできない、という事態は、〈像は本物に似ている〉と言うことはできるが〈本物は像に似ている〉と言うことはできない、という意味に解される。同じことを想起の事例(c)について言えば、〈シミアスの絵はシミアス本人に似ている〉と言うことはできるが、〈シミアス本人はシミアスの絵に似ている〉と言うことはできない、ということになる。しかし、これはわれわれの日常的な経験に反してはいないであろうか。すなわち、シミアスの絵の傍にシミアス本人を立たせて両者を較べてみれば、〈シミアスの絵がシミアス本人に似ている〉と言うことができるのはもちろんであるが、やや不自然な感じがするとはいえ、〈シミアス本人がシミアスの絵に似ている〉と言う

ことが絶対に許されぬとまでは思われないのである。

しかしここで、これまでその厳密な意味が問われることのなかった〈像〉と〈本物〉という存在を省みることにしたい。いったい、シミアスの像とシミアスの本物とはどう区別されるのだろうか？ またシミアスの本物とはいかにして知られるのであろうか？ 常識の立場からは、〈シミアスの本物〉とは、絵や彫刻として描かれたシミアスに対する生身のシミアスであるということになろう。そして、生身のシミアスはもちろん、シミアスをよく見知った人であれば一目でそれと見分けられるものである。しかしながら、たとえばシミアスの友人が久しぶりにシミアスに出会った場合、自分が目の前に見ている人は本当にシミアスなのだろうか、と疑うことがありうる。これはいわば自然的な懷疑であるが、単に心理的なものなのではない。シミアスという人が知覚の対象であるかぎり、つねに「この人は本当にシミアスなのだろうか」と問いかつ疑うことは可能なのである。知覚の対象にはこうした偶然性がつねに付きまとうものである。¹¹⁾

では、厳密な意味での〈シミアスの本物〉とはいかなるものであろうか？ 上述の〈懷疑〉という観点からは、「この人は本当にシミアスなのだろうか」という疑いをいっさい容れぬ存在こそが真に〈シミアスの本物〉であるということになろう。

ここに至って、われわれが小論の第二節で予告しておいた問題が重要になってくる。その問題とは、想起させる物についての知識と想起される物についての知識とは別であらねばならない、という想起の条件(73c8)をめぐるものである。その際、従来の解釈はこの点を十分説明できないままであったことは、すでに述べた。しかし、われわれの見方では、像と本物は知識という観点から区別されるべきものであり、たとえば〈シミアスの像〉とはつねにそれについての知識(「これはシミアスである」)が疑いを容れるものであり、〈シミアスの本物〉とはそれについての知識がけっしてそうした疑いを容れぬものである。ここに、想起させる物についての知識と想起される物についての知識とは別でなければならない、という想起の条件が生きてくるのである。すなわち、像と本物というのはあらかじめそれについての知識とは独立に存在しているものではなく、以下に示されるように、むしろ知識の相違が両者の区別の本質を成すのである。¹²⁾

ここで、われわれとしては、そうした、それについての知識がいっさい疑いを容れぬような存在である〈シミアスの本物〉を直接語るに先立ち、次のような存在を仮定することで〈シミアスの本物〉を理解するための手がかりとしたい。その仮定とは、或る存在者 x (たとえばシミアス) をモデルにしてその絵を描きつつある画家という存在である。¹³⁾ ここで、この画家によって描かれた絵を見る者はつねに「これは本当に x の絵であるのか」と疑うことが可能であるのに対して、その絵を描きつつある画家が、自らが描くに際してモデルとしている物 x について、「これは本当に x であるのか」と疑うことは不可能である。この画家にとっては x が何であるかに関係なく、自分がモデルにしている物は、自分がそのモデルを元に描きつつあるかぎり、つねに本物である。この画家が強いてモデルについて「これは本当に x であるのか」という疑いを投げかけたとすれば、この画家は描く立場ではなく見る立場に立つことになり、もはや、厳密な意味では、絵を描きつつある画家ではなくなってしまう。付言するなら、この描きつつある画家は「 x とは何であ

るか」を知覚判断として言うことはできないのであるが、 x はこの画家の動きを規制しているという意味で画家の動きに内在しており、それゆえにこの画家は x を、〈見る〉のとは違った仕方、〈知っている〉のである。

ここで、プラトンがしばしば知の典型として何かを産み出す〈技術〉を語っている¹⁴⁾ことを思えば、本物についての知識とは像を産み出しつつある技術であると言ってよいであろう。以上の議論から少なくとも、それについての知識がいっさい疑いを容れぬような〈本物〉という存在が概念上可能であるということは示されたと思われる。

そして、このように像と本物がその知識によって区別されるとした場合、像が本物に似ていると言うことは有意味であるが、本物が像に似ていると言うことは無意味である。なぜなら、『パイドン』にあって、〈似ている〉というのは正確には〈似てはいるが劣っている〉という意味なのであるが、像を産み出しつつある画家のような存在にとって〈モデルは像に似てはいるが劣っている〉などと言う余地はまったくなく、この画家にとってモデルは像と端的に〈同一〉であるからである。念のために一言すると、ここで言う同一性というのは程度の高い類似性などといったものではなく、類似性とはまったく別種のことがら、いわばカテゴリーを異にすることがらである。¹⁵⁾

話をシミアスの件に戻したい。先に述べたように、〈シミアスの像〉と〈シミアスの本物〉というのをその知識が疑いを容れるか否かで厳密に区別した場合、〈シミアスの本物〉とはいったいどんな存在なのであろうか？ 生身のシミアスについても、それが知覚の対象であるかぎり、つねに〈これは本当にシミアスなのか〉という懷疑が可能であるとすれば、そうした疑いをいっさい容れぬシミアスについての知識などというものがありうるのであろうか？

ここでわれわれは少し問を変えてみたい。すなわち、シミアスをいちばんよく知っているのは誰か、という問を立ててみたい。そうした者が有するシミアスについての知識は、上述の懷疑をいっさい容れぬものであることが期待されよう。もちろん、赤の他人よりはシミアスの友人の方がシミアスをよく知っているということはいえるであろう。しかしながら、そうしたシミアスの友人の立場でも、自分の見ている人が本当にシミアスなのかどうか、と疑う可能性があることはすでに（二一―頁）見たとおりである。では、友人よりもシミアスをよく知る人とは誰か？

それはほかならぬシミアス本人なのではないか。もちろん、〈シミアス本人〉という存在を、何の吟味もなしに、〈これは本当にシミアスなのか〉という疑いをいっさい容れぬシミアスについての知識として承認するわけにはいかない。じっさい、常識的に理解されたシミアス本人というのは、自分で自分が何をしているのか分からないという状態に陥ることもありうる以上、「自分は本当にシミアスなのか」と疑うことも可能であろう。しかしここで先の画家についての談話を参考にして、シミアス本人がシミアスについて有する知識として、自らの像を産み出す作用、すなわち自己を物質世界ないしは知覚対象の世界に表現する意志作用、要するに為されつつある行為を考えてみれば、これはそうした疑いを容れぬ知識に通じるものなのではないだろうか。¹⁶⁾ここに至って、先（二〇六頁）に述べた想起の事例(a)(b)(c)において、想起される物が一貫して

行為を為しうる人間であったことの意味が理解される。¹⁷⁾

以上の議論を念頭に置いて、等しさのアイデアの想起の議論にまつわる、伝統的なもう一つの問題を考えてみることにしたい。

五 等しさのアイデアの想起をめぐる問題(二)——「等しい物どもそのもの」

等しさのアイデアの想起の議論については、すでに五・六世紀の哲学者ダマスキオスが次のような問題を指摘している。¹⁸⁾ それはすなわち、(二〇九頁の)手順(5)において語られる「等しい物どもそのもの」(74c1)という表現は何を指すのかという問題である。

すなわち、手順(5)の論点の目的が、手順(6)において知覚世界の等しい諸事物と等しさのアイデアとは異なるものであるという結論を得ることにある以上、手順(5)に現われる「等しい物どもそのもの」という表現はアイデアを指していなければならないが、これは訳語からも分かるとおり複数形で表記されている。ところが、アイデアが複数形で表現されている例などプラトンの全著作でも他にほとんど例はなく、¹⁹⁾ とりわけ『パイドン』においては他の箇所ではアイデアは「部分を持たない」とか「単一の相を有する」などと言われており(78c-d)、アイデアが複数形で表記されることなど思いもよらないことなのである。

この問題に取り組むにあたり、まずわれわれが指摘しておきたいのは、従来の解釈者たちは手順(5)においてアイデアの複数形と見える「等しいものどもそのもの」という表現に目を奪われるあまり、次の点には十分な注意を払ってこなかったということである。すなわち、第一には、手順(5)においては、等しさのアイデアに相当するはずの存在に「等しいものどもそのもの」および「等しさ」(74c1)という二重の表現が与えられているという点である。²⁰⁾ 第二には、手順(5)の前後ではアイデアに対してすべて「等しい物(そのもの) (αἰτὸν) τὸ ἴσον」という中性単数形の冠詞と形容詞の対による名詞化表現が用いられている²¹⁾ のに反して、手順(5)一箇所においてのみ例外的に、「等しいものどもそのもの」という表現に加えて「等しさ」という女性抽象名詞による表現が用いられているという点である。²²⁾

こうしたテキスト上の特徴、すなわち手順(5)以外の箇所ではアイデアを指すのにほとんど同じ表現が用いられているのに反して手順(5)においてのみ異なった表現が用いられているという特徴を見るかぎり、今仮に手順(5)とその前後の議論の繋がりを度外視するならば、手順(5)で使われている「等しいものどもそのもの」および「等しさ」という表現は等しさのアイデア以外の物を指すと解するのが自然であると思われる。²³⁾

しかしもちろん、問題は手順(5)とその前後の議論との繋がりである。手順(4)(5)(6)の議論の趣旨は、知覚世界における等しい諸事物と等しさのアイデアとの区別を確立するというものであり、手順(4)では知覚世界における等しい諸事物が等しいと見えることもあれば等しくないに見えることもあることが指摘されたのであるから、今度は手順(5)において等しさのアイデアは等しくないと見えることはけっしてないという論点が確立されることが期待され、それゆえに〈等しくな

いと見えることがない〉という述語の主語として妥当なのは等しさのアイデア以外にはないと従来は考えられてきたのである。²⁴⁾しかし、本当にそうなのであろうか？

ここでわれわれは先(二〇六頁以下)に述べた、想起が成立するための知識に関する条件を思い出したい。すなわち、想起が成立するにあたっては、想起させる物(シミアスの絵)についての知識と想起される物(シミアス本人)についての知識とは異なっていなければならない、という条件のことである。シミアスの絵からシミアス本人を想起するという想起の事例(c)にあって、この条件がいかに重要であるかは第四節で示した。すなわち、想起させる物(シミアスの絵)とはその知識が懐疑を容れるものであるのに対して、想起される物(シミアス本人)とはその知識が懐疑を容れぬものなのであり、想起させる物たる像と想起される物たる本物との区別は、その知識の相違を本質とするものなのであった。

等しさのアイデアの想起が語られるに際しては、想起の事例(c)が範例になるということは一般に認められているのであるから、等しさのアイデアの想起についても当然同じ議論が妥当すると予想される。すなわち、想起させる物である、知覚世界に存する等しい諸事物についての知識は懐疑を容れるものであり、これに対して想起される物である等しさのアイデアについての知識は懐疑を容れぬものとなるはずである。ここでテキストに戻ると、じっさいに手順(4)においては石材や木材が等しいとも等しくないとも現れると言われている(74b7-9)。これは知覚世界における等しさ(想起させる物)の知覚(知識)はつねに懐疑を容れることを指摘したものともみることができる。ここで先の、想起させる物と想起される物との区別はその知識の相違を本質とするものだという点を念頭に置くならば、手順(5)(=74c1-2)は、想起される物たる等しさのアイデアについての知識はけっして懐疑を容れない、ということを言おうとするものと解される。手順(5)において、その等しさのアイデアについての知識としては、女性抽象名詞単数形である「等しさ」がふさわしいであろう。このように解して、少なくとも形式的には、知覚世界における等しい諸事物と等しさのアイデアとの区別は問題なく成立するのである。

では、手順(5)において古来より問われてきた中性複数形の「等しい物ども」とは何を指すのであろうか？ これもやはり等しさのアイデアの知識を指す表現のヴァリエーションの一つなのであろうか？ われわれはそうは考えない。

いったい、〈等しい〉とはどういう事態を指すのであろうか？

等しさのアイデアの想起の議論における手順(1)や(4)では、石材が石材に等しいとか木材が木材に等しいとかいった例が挙げられている。ではなぜ、手順(4)において石材や木材が等しくないものとして現れることもあるということが語られえたのであろうか？ 具体的にいかなる意味で石材や木材が等しくないと言われるのか、それは今は措く。一見等しく見えても精密に計測したら等しくなかったなど、可能な解釈はいろいろあると思われるが、それは措く。肝心なのは、石材同士が等しいとか木材同士が等しいとかいった場合、必ず両者が等しくないとも見られるという点である。それはなぜなのであろうか？ それは、石材の場合でも木材の場合でも、〈等しい〉と語られる知覚世界の物体は必ず一つのまとまりを成しているからではないだろうか。

つまり、知覚世界というものは、石や木など一つのまとまりを成す物体が多数集まってできており、この世界にあっては、すべての物体について一方が他方より大きいとか小さいとか言うことが可能である。したがって、この世界においてはけっして大きくあるいは小さくありえぬような絶対的な等しさが存する余地はないのである。

では、絶対的な等しさが語られるのはどこにおいてであるのか？ プラトン研究者からはこの問に対してはただちに「それはイデアの世界においてだ」という答が返ってくるのが確実であり、それは必ずしも誤りではないのであるが、絶対的な等しさが最初に成り立つのはじつはそこにおいてではない。それはまずは、いっさいのまとまり、すなわち一性を欠いた純粋に多なる世界²⁵⁾において成立するのである。いっさいのまとまり、すなわち一性を欠いたこの世界にあっては、〈xがyより大きい〉といった事態は成立しない。なぜならば、そもそも一つのまとまりを持ったxやyといった物体が成立していないからである。そして、そのような純粋に多なる世界こそは、物体の本質であると考えるのが妥当であろう。否、等しさというものも一つのまとまりを持った二つの物体の間に成り立つのが本来のあり方ではないか、との反論があるかもしれないが、それは当たっていない。そうした物体から成る世界においては、等しさは〈大きくも小さくもない〉という否定によってのみ捉えられるからである。等しさが直接に肯定されるのは、純粋な多としてであると考えられる。

「等しい物どもそのもの」を以上のように絶対的な多と解したとき、等しさの想起の手順(5)においては、等しさのイデアに規定された純粋な知すなわち優れた意味での魂（思慮＝プロネーシス）と、絶対的に等しいものである物体という、存在論的に相反する二つの存在が語られていることになる。このとき、誤解してはならないのは、純粋な知と純粋な物体というのは、相互にまったく異質な存在である以上、空間中に並存するようなものとして表象されてはならないということである。

では、両者はいかにして共存するのであろうか？ その手がかりは、すぐれた意味での魂は「自らを動かすもの」（『パイドロス』245c7, d7, e3, e5-6, 245e7-246a1）として動きを本質とする（245c5, c8, e6）という点にある。²⁶⁾ では、その魂の動きとは具体的にいかなる動きであるのか。ここでわれわれは『パイドン』の比較的冒頭に近いところで語られる〈死〉の定義に注目したい。その死の定義とは次のようなものである。すなわち、死とは、「魂の物（身）体からの離脱」であり（64c4-5）、「死んでしまっているとは、物（身）体の方は魂から離脱してそれ自体に成っており、また魂の方は物（身）体から離脱してそれ自体で在る」（64c5-8）ということなのである。この〈死〉という物（身）心分離にあって、物（身）体の方は純粋な多として現れると考えられるが、この同じ〈死〉において魂の方に着目すると、魂不死のいわゆる最終証明（100b-107a）において、魂は物（身）体に「生をもたらし」（105d4）とされている。これはつまり、魂が物（身）体と合一する動きであると解してよいであろう。そして、こうした魂の物（身）体との合一という動きこそは、あらゆる行為に先立つ根源的な行為といってよいであろう。²⁷⁾ したがって、等しさのイデアの想起の議論に先立つ事例(a)(b)(c)において、想起されるものがすべて人間であり、

想起において要求されるその人間についての知識が単なる知覚なのではなく人格に関わるようなものであったことも、ここに至って理解される。すなわち、人間にとって最高の知とは、明晰な意識をもって行為する、という能動的な知なのである。そして、極限まで明晰な意識による行為が、純粋な魂（思慮＝プロネーシス）が純粋な多としての物（身）体と合一するという行為なのではないだろうか。

『パイドン』における想起説において想起されるすぐれた意味での知とは以上のようなものであることが、後のアイデア原因論（100c sqq.）以下の議論において明かされるのではないかと、この予測をもって小論の一応の締めくくりとしたい。

註

- 1) 拙稿『『パイドン』における魂不死の証明の構想（一）——魂不死の“円環的”証明（70c-72e）』、『中部大学国際関係学部紀要』第二十六号（二〇〇一年）、一四九—一五九頁。
- 2) テキストは J. Burnet (ed.), *Platonis Opera*, Oxford, tomus I, 1900（OCT旧版）; tomus II, 1901（OCT）に拠る。なお、以下において、〔 〕内は引用者による補足。また、以下、『パイドン』からの引用は書名なしで行なう。
- 3) 以下の議論については、拙稿『『パイドン』における想起説——類似性の概念に着目した一考察』、『名古屋大学哲学論集』第四号（一九九八年）、三三—四八頁を併せて参照。
- 4) D. Gallop, *Plato Phaedo*, Oxford, 1975, p. 117.
- 5) Gallop, *op. cit.*, p. 117 sq.
- 6) 小池澄夫は「アイデア・原範型の消息」、『理想』五五六号、一九七九年九月、一〇八—一二〇頁）——五頁上段でシミアスとケベスの間のエロースの関係に触れている。なお、この論文と私の小論での論旨との関わりについては、神崎繁により知った。
- 7) 以下、英語の表記は、われわれがギリシア語を機械的に英語に置き換えたものである。
- 8) 74b8-9の τῷ... τῷ...については、τότε... τότε...の異読もあり、これまでにさまざまな解釈が提出されてきた（cf. R. Loriaux, *Le Phédon de Platon*, vol. I, Namur, 1981, pp. 139-143）が、ここでは深入りしない。われわれとしては、石材や木材が何らかの意味で、等しいと見えることもあれば等しくないとも見えることもある、という点を確保すれば足りる。
- 9) 以下については、拙稿『『パイドン』における想起説』三五—三六頁参照。
- 10) 前掲拙稿三八頁参照。また、興味深いことに、いわゆる『パルメニデス』第一部にあっては、アイデアとそれを分有する事物とについて、後者が前者に似ている以上前者が後者に似ているのも当然との合意がなされた上で、両者の間の類似性の原因として第三のアイデアが立てられて無限遡行が導かれるという形でアイデア論批判が遂行されている（132c-133a）。ここで批判されている〈アイデア論〉が一般にプラトン本来のものでないことは、藤沢令夫『アイデアと世界』（岩波書店、一九八〇年）九六—一四五頁所収の論文「プラトンのアイデア論における「もつ」「分有する」および「原範型—似像」の用語について——その世界解釈における思惟の骨格」で示されている。とりわけ、個物とアイデアの類似関係については、同書一二四—一二五頁参照。
- 11) アイデアの想起の議論において、人が似た物から想起する場合には、想起させる物は想起される物に類似性の点で劣っているのではないかと思惟するのが必然であるとされており（74a5-7, d5-7, d9-e4, 75a11-b2, b7-8）、等しさのアイデアの想起においてはそうした思惟が、知覚世界における等しい物は等

- しいと見えることもあれば等しくないと見えることもある、という形で具体化されている(74b7-9)のは、知覚対象はつねに疑いうるとプラトンが考えていたという解釈の傍証となろう。
- 12) 等しさのアイデアの想起の議論では、想起される物(アイデア)とその知識とがともに「思惟する $\epsilon\lambda\lambda\omega\sigma\epsilon\iota\nu$ 」という動詞の目的語として同格に扱われている(74b6, c8)というテキスト上の事実は、この解釈を支持する。拙稿『『パイドン』における想起説』四〇頁および四六頁註13) 参照。
- 13) Cf. G.E.L.Owen, "Particular and General", in: G.E.L.Owen, *Logic, Science, and Dialectic: Collected Papers in Greek Philosophy*, 1986, New York, pp. 279-294; p. 291. なお、このアリストテレスについての論文中にプラトン解釈におけるわれわれの発想と類似の観点があることは、甲斐博見の示唆により知った。
- 14) 『パイドロス』270b, 『テアイテトス』147b, 『ソピステス』265a sqq.
- 15) 拙稿『『パイドン』における想起説』四三頁参照。
- 16) シミアスの恋人はシミアスを単に知覚対象として知るばかりではなく、いわばシミアスと一体になるようにしてシミアスを知る人であるのかもしれない。『饗宴』192d-e 参照。
- 17) また、これは、『パイドン』の末尾近く(115c-d)で、単に見られるものとしてのソクラテスは本当のソクラテスではなく、哲学的対話をしているソクラテスこそが本当のソクラテスなのだ、と言われていることと軌を一にするものである。拙稿『『パイドン』における想起説』四六頁註16) 参照。
- 18) L.G.Westerink, *The Greek Commentaries on Plato's Phaedo*, Vol. II, *Damascius*, Amsterdam/Oxford/New York, 1977, I, § 302, p.174 sq.
- 19) 例外としては『パルメニデス』129b1に現われる $\alpha\upsilon\tau\grave{\alpha}\ \tau\grave{\alpha}\ \delta\muοι\alpha$ がある。ここで述べられている〈アイデア論〉がプラトン本来のアイデア論ではないという点については、註10)に引用した藤沢前掲書を参照。
- 20) Cf. Gallop, *op. cit.*, p. 124; M.V.Wedin, " $\alpha\upsilon\tau\grave{\alpha}\ \tau\grave{\alpha}\ \acute{\iota}\sigma\alpha$ and the Argument at *Phaedo* 74b7-c5", *Phronesis* 22 (1977), pp. 191-205; p. 196.
- 21) 小論二〇八-二〇九頁の手順(1)(6)(7)(8)。
- 22) Wedin, *loc. cit.*
- 23) J. Burnet は「等しいものどもそのもの」を数学的对象と解し(*Plato's Phaedo*, Oxford, 1911, ad 74c1), R. S. Bluck は後の箇所(102d6-103b5)に出てくるいわゆる〈内在形相〉と解している("Plato's Form of Equal", *Phronesis* 4 (1959), pp.5-11;p.8)。また R. Loriaux はそれを等しい物であるかぎりでの個物と解している(*op. cit.*, p. 145 sq.)。
- 24) たとえば, P.T.Geach, "The Third Man Again" (1956), in: R.E.Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 265-277; p. 269 や R.P.Haynes, "The form equality, as a set of equals: *Phaedo* 74b-c", *Phronesis* 9 (1964), pp. 17-26; p. 23 および J. M. Rist, "Equals and Intermediates in Plato", *Phronesis* 9 (1964), pp. 27-37; p. 29 sq. など。
- 25) 『パルメニデス』においては、そうした純粋な多として、「多多 $\pi\lambda\acute{\eta}\theta\eta$ = multitudes」(158c1)というものが語られている。田中美知太郎訳『パルメニデス』(『プラトン全集』第四巻, 岩波書店, 一九七五年) 一二一頁註2) 参照。
- 26) 拙稿『『パイドン』における魂不死の証明の構想(一)』一五七頁参照。
- 27) ここにはもちろん、生と死の関係、また心身合一と心身分離の関係をどう理解すべきかという困難な問題が伏在している(この点については金山弥平との対話で気付いた)が、この点についての検討は別の機会に行うこととしたい。